

はじめての赤ちゃん

1971
作品ナンバー0103

文部省選定 中央児童福祉審議会推薦 第26回広告電通賞 第9回
日本産業映画コンクール奨励賞

はじめて赤ちゃんを持った母は、この新しい生命をどう扱ったらいいのか戸惑うことが多い。映画は、こうした母親たちに、出産から3ヵ月までの育児の基本を知ってもらい、育児に対する自信を持ってもらうことを願って製作された。



産声は、赤ちゃんが自分の肺で呼吸を始めた知らせで、呼吸とともに肺がふくらみ、肺に血液が流れ始める。母体からの栄養を運んでいたヘソの緒も断ち切れ、消化器もその働きを始める。こうして赤ちゃんの体はお母さんから離れて一人立ちする。

はじめて赤ちゃんを持ったお母さんの乳は、はじめは出にくい。気長に吸わせ、時にはマッサージなどしてできるだけ出すようにしたい。赤ちゃんはなるべく南向きの明るい所に寝かせ、室温は18度から25度が適温である。赤ちゃんは、泣き声で空腹やおむつの汚れを知らせる。おむつはもともとのお母さんの手を省くために工夫されたもので、赤ちゃんにとっては気持ちのいいものではない。まだ腹式呼吸なのできつくしめないように注意したい。入浴のお湯の温度は38度から40度くらい。お母さんにとっては大事業だ。

満1ヵ月の健康診断。体重測定は赤ちゃんの発育状態を知る手がかりである。まだ赤ちゃんの首が座っていないので、オンプは禁物。1ヵ月が過ぎたら、そろそろ日光浴をさせたい。はじめは1日に5分間くらいずつ、頭や顔に陽が当たらないよう工夫しながら陽に当て、2週間くらいかけて足先から次第に上の方へ陽の当たる部分を広げていく。日光は、赤ちゃんの骨を作る大切な要素である。この頃から1日10分くらい外気浴させ、皮膚や肺に外気の刺激を与え鍛えていく。

生まれて3ヵ月、知恵がつき、人間として様々な可能性の芽が見えはじめてくる。

記録

16ミリ

カラー／20分

日・英・タイ・

中国語版

- 企画
雪印乳業株式会社
- 監修
国立小児病院副院長
浅野秀二
- 協力
日赤産院

スタッフ

- 製作
村山英治
村山英世
- 脚本
藤原智子
- 演出
瀬藤 祝
- 撮影
三枝弘夫
- 音楽
長沢勝俊
- 進行
松原勝三
- 解説
伊藤 克